

協力

「タカシくん、手伝ってよ。」

ミュキの学級では、授業の後、その日の日直が黒板をきれいに消すことになっていきます。今日はミュキが日直でした。ミュキは、早く外に遊びに行きたくて友達のタカシに仕事を手伝ってもらおうと思ったのです。

「なに言ってるんだ。日直の仕事だろ。自分でやれよ。」

「学級の目標に、協力し合う学級って書いてあるじゃない。協力してよ。」
それまで笑顔だったタカシでしたが、ぷいと横を向いて教室から出て行きました。結局、ミュキは自分で黒板をきれいにしてから、少しおくれで外へ遊びに行ったのでした。

日曜日、ミュキはお父さんと舟戸児童公園に行きました。蒸気機関車「D51（愛称デゴイチ）」が展示されていて、大の鉄道好きであるお父さんは、よく散歩ついでに機関車を見に行くのです。

「昔はこのあたりにも蒸気機関車が走ってたんだよ。走らせてみたいなあ。」

お父さんは、目をかがやかせて運転席をのぞきこんでいます。

「ねえ、お父さん。蒸気機関車って石炭を燃やして走るんだよね。」

「そうだよ。後ろの炭水車（機関車に連結されている石炭庫や水タンクがある車両）に積んである石炭を、機関車の火室で燃やして蒸気を作るんだ。その蒸気ので走るんだよ。」

「運転士さん、大変だね。」

お父さんは笑いながら言いました。

「そりゃそうだよ。そもそも一人じゃ運転はできないしね。」
「一人ではできないってどういうこと。」

「石炭を燃やして蒸気を作る仕事と、機関車の速さを調節したりブレーキをかけたたりする仕事は、同時にはできないからね。二人で協力して走らせたんだよ。」

ミュキは、なるほどと思いました。



舟戸児童公園のデゴイチ

「そうか。二人で協力し合って動かすのなら、一人でするよりけっこう楽しいかもね。」

お父さんは、まじめな顔になって話し出しました。

「石炭を燃やして蒸気を作る役目の人を機関助手というんだけど、つねに必要な蒸気をきちんと作り出すように石炭を燃やし続けるのは大変だったようだよ。石炭もたんに投げ入れるだけでなく、火室のどのあたりに投げ入れればよいかということまで考えて、燃やしていたんだって。それに蒸気を作るための水をポンプで補給しなければならぬ。それも機関助手の仕事だったんだよ。そうして作った蒸気の量をうまく調節して機関車を動かし、必要なスピードで走らせるのが機関士の仕事。ほら、調節用のハンドルがたくさん並んでるだろ。機関士が、これらを一つ一つ調節して走らせたんだよ。」

いつしかミユキは、お父さんの話に聞き入っていました。「ほら、機関士の席って左側にあるだろ。機関車って前から長いから、特に右側の前方の様子は機関士からは見えないんだよ。だから右側に線路が分かれたり、機関車が右に曲がったりするときは、機関助手が右側の安全を確認して機関士に伝えていたんだ。また、そのときの状況によっては、機関助手に代わって機関士が石炭を火室に投げ入れることもあったそうだよ。」

「本当に二人で協力し合って走らせていたんだ。」
「そうだよ。二人がそれぞれの仕事をきちんとやらないと機関車は走らない。それだけでなく、どちらかの仕事一人でではできないときには、助け合って機関車を走らせていたんだ。協力って力を合わせることで、まずそれぞれが自分の力をきちんと発揮することが大切だろ。そのうえで、さらに足りない力をいっしょに助け合って発揮したからこそ、人数以上の大きな力になって、目的地まで人や物を運ぶという仕事をやりとげたんだよ。だから、二人ともそれぞれの仕事だけでなく、助け合って機関車を走らせることに必死で、楽しいと思う余裕なんてなかったかも知れ



機関助手席から前方の視界



機関助手の席



機関士の席



運転台のいろいろな機器

ないね。」

お父さんの話を聞きながら、いつしかミュキは「協力し合う学級」という目標のことを思い出していました。

「わたし、協力という言葉の意味をちゃんと分かっていた。いなかったみたい……。」

「はは、どうした。まじめな顔して。」

お父さんの笑顔が、いつものタカシの笑顔に重なって見えました。



王寺駅構内を走るデゴイチ (1971年)

○ お父さんの話を聞く前のミュキは、どんなことを協力だと考えていたのでしょうか。話を聞いて、その考えはどのように変わったのでしょうか。

○ 今、あなたには、どんな学級での仕事や役割がありますか。学級だけでなく、学校や家族、そのほかの集団での仕事や役割についてもふり返り、話し合ってみましょう。